



TITLE:

鎌倉 昇著『価格・競争・独占』

AUTHOR(S):

堀江, 保蔵

CITATION:

堀江, 保蔵. 鎌倉 昇著『価格・競争・独占』. 経済論叢 1958, 82(6): 440-443

ISSUE DATE:

1958-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132652>

RIGHT:

經濟論叢

第八十二卷 第六號

ヒルファディング創業利得説の批判序説 (一)	岡部利良	1
再生産の法則と利潤率均等化法則	吉村達次	19
アメリカ石油産業の發達と国家の役割	金田重喜	40
資本蓄積と長期均衡に関する ロビンソン・モデルとカルドア・モデル	山谷恵俊	63
書評 鎌倉昇著『価格・競争・独占』	堀江保藏	80

昭和三十三年十二月

京都大學經濟學會

《書評》

鎌倉 昇著

『価格・競争・独占』

堀江 保蔵

一

鎌倉君からこの本をもらって、いつもするように、序文を読み、日次に日を通し、頁をバラバラ繰ってみた。書名はいかめしいが、「象徴となった反トラスト法」とか「デュポン社長の証言」とか、「月賦販売の種々の型」とか、「技術的革新と発明の担い手」とか、「かくされた値引競争」とか、理論経済学の専攻でない私にも面白そうな項目があるので、そこそこ拾い読みしているうちに、つい全部を読んでしまう結果になった。

「事実をして歴史を語らせる」というのは、私たち歴史を研究しているものの普通のやり方であるが、「事実をして理論を語らせる」というやり方の理論経済学書は、少なくともわが国の経済学界には、あまり見かけられない。という意味で、理論経済学と経済史学との距離の遠さをつねづね感じている私には、

第八十二巻 四四〇 第六号 八〇

この書物は、そのあまり見かけない部類に属するものではないかと思われた。アメリカの普通の経済学教科書は、日本のほど抽象的ではないが、それでさえ、学生はその現実とのギャップに悲鳴をあげるそうである。まして日本の経済学教科書が、学生諸君とくに教養課程の学生諸君にとって、ひじょうに取っつきにくいのは、当然であろう。このような理論と現実とのギャップを少しでも埋めたいというのが、著者の執筆態度であるようにうだ。

この態度が、著者をして、つとめて「事実をして理論を語らせる」方法をとらせ、またひじょうに平易にして流麗な文体で書かせたゆえんであるが、しかし、よく読むと、もう少し深い意図があるようだ。すなわち、単に事実や事件を例示して、理論をわかりやすく書き直すことに目的があるのではなく、理論の現実化ないし現実の理論化ということが、この書物の真のねらいであるようにみえる。

いうまでもなく、経済学理論は現実から抽象して立てられ、それによって今日にまで発展してきた。とくに近時における価格理論の発展には目ざましいものがあるといわれているが、抽象化の挙句のはては、表現形式（とくに数式）や用語はもちろん、書かれた内容も、門外漢には近づきたいものとなってきた。曰く完全競争、曰く不完全競争、曰く独占・複占・寡占等々。このように発展してきた価格理論体系も、実は経済主体

(個々の人間や企業)を、いわば真空の中に入れた状態において組立てられたものであって、競争といふ独占といつても、現実には、もはや完全競争の状態が存しないのはもちろん、厳密な意味では独占も存しない。現実にあるものは、平たくいえば、その中間の状態である。この中間の状態の論理的説明こそ、理論と現実のギャップを埋めるものであり、著者が現実をして理論を語らせようとしているのは、まさにこの点にあるようにみえる。ふつうに独占の時代といわれる今日の現状は、著者の言葉をかれば、競争の変質と多様化ということであつて、著者はここに主たる関心をもつて筆をすすめているのである。

二

これまでの価格理論のおもな内容を、第一章伝統的な価格理論、第二章独占価格の理論の二章で簡潔にまとめた著者は、競争の変質とオリゴポリーと題する第三章で、独占的競争ないし不完全競争と呼ばれている状態を吟味する。独占的だといわれている大企業ほど、その相互間の競争がはげしいことは、われわれがまのあたりにみているところである。もちろん、生産が大企業に集中すれば、新たに同種の企業が起ることはほとんど不可能だという意味で、競争は制限される。しかし、それとともに競争の要素が次第に消滅してゆく、あるいは大企業は独占の座に、あぐらを組み、独占利潤を貪るようになるというのは、

少なくとも現実の事態を見ない議論の仕方であらう。この点、著者は、経済的集中が進むにつれて、同時に競争の形も変つてゆく、価格競争よりもむしろ非価格競争に重点が移つてゆき、全体としての競争の幅も深さも増してきた、と断定する。

ついで著者はオリゴポリーが発達する地盤の検討に筆を進めているが、そこでの着眼点は、企業費用の性格とオリゴポリーの關係にあり、すなわち例を製靴業・レーヨン工業・靴下工業にとり、またベイン教授の研究を紹介して、産業の種類によつてオリゴポリーが成立しやすいものとそうでないものがあることを指摘する。さらに、オリゴポリーが成立している産業においてしばしば見られるプライス・リーダーシップについて、その事実を掲げながら、理論的検討を行い、とくに「折れ目のある需要曲線」の意味について、著者の積極的な考えを打ちだしている。

第四章非価格競争は、この書物における著者の主要な関心をまともにも示した章である。いうまでもなく、一般に経済学で取扱われている競争は、企業相互間の価格競争である。誰がこしらえても品質に差がないような商品の場合にはそれでよいが、差がある場合にはどうなるのか、この方がむしろ現実の問題である。さらに汽車と飛行機、銅とアルミニウム、綿と化繊といった工合に、商品の種類がちがう場合にも、きわめてはげしい競争が行われている現実を、理論的にどう説明したらよいのか

ということも、経済学の重要な課題であらう。この章で著者が取上げているのは、アメリカにおける月賦販売の種々の型、技術革新と発明、広告、かくされた値引競争の四項目であるが、私がとくに興味を覚えたのは、今日、技術革新と発明の主たる担い手が、オリゴポリーが成立しているような大企業であることを説明した箇所であった。

第五章限界原理と平均原理は、企業の価格決定態度の研究であつて、多くの企業は平均原理によつてゐるとの説（オックスフォード大学のホール、ヒッチ両教授）と、多くの優秀な大企業は限界原理によつてゐるとの説（ワイズコンシン大学のフリー教授）が比較検討されている。そして著者は、実際には平均費用と限界費用とが一致している場合もあることを述べ、進んで景気変動の要因を取入れて、平均原理を含む論理的な矛盾を指摘している。

第六章隔地間の競争における主題は、ベーシング・ポイント・システムの検討にあり、すなわち著者は、それは、隔地間の競争とブライス・リーダーシップの結合したものとつてよいと定義し、鉄鋼業、セメント業におけるベーシング・ポイント・システムを紹介してのち、それが完全競争だというアダマス教授の証言を牽強附会であると断じて、むしろその独占的性格を指摘する。しかし、このシステムだけをとりえて、競争から独占への移行を云々することは当をえないと著者はいう。

第七章對抗勢力論は、主としてガルブレース教授の所論の批判に充てられている。一般に価格の理論においては、市場の一方の側（the same side）、すなわち供給の側もしくは需要の側における競争とか独占とかを問題にしている。これに対してガルブレースは、市場の向う側（the other side）における諸力——企業に対しては労働組合、消費財に対しては消費者を代者する大規模小売商——の對抗關係に鋭い眼をそそぎ、これを對抗勢力（countervailing power）と名づけた。経済システムのなかに、オリゴポリーのもつ独占的要素に対する抗毒素が自然に生れてきているというのが、その主張の骨子である。これに対して著者は、その着眼点のユニークさを高く評価しながら、この主張を手放しに肯定するわけにはいかないとし、對抗勢力が對抗勢力として作用しうるかどうかは、市場の景況にかんじ依存すると鋭い批判を投げかけ、それに関連していわゆるコスト・インフレが景気上昇期の現象であることを指摘する。

第八章価格変動と予想の要因では、前の五章とはちがった問題、すなわち動学的価格理論の重要な論点である予想の問題の現実的な意味を明らかにしようとしており、議論が抽象的なものを避けるために、商取引所における先物取引や証券市場における投機などに相当深く立入って論及している。

三

専門家でない私が、以上に述べた章別の内容は、あるいはまちがった理解に立っているかも知れないし、また著者が置いた主眼点を逸しているかも知れない。しかし、この書物が、透徹した理論的頭脳と現実に対する深い知識の持主でなければ書きえない性質の書物であることは、断言してもよいであろう。したがって、同じような頭脳と知識を持たない私には、この書物の紹介が精々で、批評はできないが、わが学界において注目すべき一書となるであろうことは、明らかであると思う。

はじめにも述べたように、この書物は、理論の現実化ないし現実の理論化をねらったものである。ただ惜しむべきは、その

現実が主としてアメリカのそれであることである。もちろん、これは、著者の二年半にわたるアメリカ留学の成果の一端として、むしろ高く買うべきものであるが、私が著者に願うのは、日本の現実に即してこのような書物を書いてもらいたいことである。そのためには、研究者側における現実認識への謙虚な態度と、わが経済界・産業界の経済学に対するいっそうの理解と協力とが前提条件となろう。それがなければ経済学はいつまでたっても「日本の経済学」とはなりえない。この書物について、著者は理論と実際の架橋たらんことを願っているが、私はさらに、日本の現実の理論化への架橋たらんことを期待したい。

(A5判、二六五頁、索引七頁、定価四五〇円、創文社)